

クルバンガリー追尋—もう一つの「自治」を求めて—

バシキール人のクルバンガリー(1889-1972)は、帝政末期のロシアにおいてすでにイスラム指導者として頭角をあらわしていたが、1917年のロシア革命のなかでは、全ロシア・ムスリム大会をはじめバシキール人の民族大会にも参加し、その民族運動の一翼をになつた。十月の首都の武装蜂起をうけてウラル地方に樹立されたソヴィエト権力に対して、バシキール民族運動は中立の立場をとりつつ、オレンブルグで自治を宣言し、白軍について戦うことになるが、やがてゼキ・ヴァリードフ(1890-1970)の指導の下で、コルチャーク軍を離反する。彼らはソヴィエト政府の側に移り、1919年の春から南ウラルにおいて民族自治を認められ、民族自決の実現に向かう。しかし、白軍のもとにとどまりウラルからシベリアへと敗退し、満州、そして日本へ逃れてきたのがクルバンガリーのグループである。

「ペレストロイカ」の末期からソ連の崩壊を経るなかで、各地で主権宣言がなされ、自立性を強めた各共和国において、民族運動への関心と研究が高揚した。南ウラルでも、バシキール人の民族運動への関心が高まり、再評価が進むなかで、建国の父としてのヴァリードフの研究には目覚しいものがある。その関連で、従来「反革命」のレッテルを付して言及されるのみであったクルバンガリーについても、そのイシャーシとしての系譜とウラルにおける宗教・文化活動が明らかにされ、革命から内戦期のヴァリードフとの対抗、独自の政治方針も明らかになってきた¹。私も、かつて日本の外交史料館に保存されている文書をもとにクルバンガリーの活動をあとづける機会があった。(『クルバンガリー略伝—戦間期在留回教徒の問題に寄せて—』ロシア革命史研究資料№3, 1996年、札幌)² だが、ここでは、彼の帝政ロシアにおける活動、1917—1920年の革命と内戦の時期の行動について十分な解明ができなかった。しかし、最近、ウファで以下の二つの資料が新たに紹介され、これは革命から内戦期に白軍の側で戦ったバシキール人の運動、その指導者クルバンガリーの理解に向けて極めて重要な資料である。

¹ Юлдашбаев Б. Х. Новейшая история Башкортостана. Уфа, 1995. С. 95-96. ユルダシユバーエフは、ヴァリードフの領域自治の追求に対抗するものとしてクルバンガリーの文化的自治の要求とコルチャークのもとでの反ボリシェヴィキ活動を高く評価した。この評価に対し、現在、革命と内戦期の研究をリードしているクリシャリーポフからの批判がある。ユルダシユバーエフの娘でもあるユヌーソヴァは、ウラルにおけるイスラム史のなかでクルバンガリーの系譜と活動を位置づける作業を行った。Юнусова А. Б. Ислам в Башкортостане. Уфа, 1999. С. 74-82, 107-115. クリシャリーポフも近著で一節を「シベリア・極東における白軍でのバシキール運動」と題して、最新の研究状況を述べている。Кульшарипов М. Башкирское национальное движение (1917-1921 гг.). Уфа, 2000. С. 322-338.

² この要旨は次の文献に発表された。Нисияма К. Мусульмане в Японии // Ватандаш. 1999. № 10. С. 188-194. ソヴィエト側についたヴァリードフらの民族自治の実現をめぐる1919-20年の困難については、近著でふれた。(拙著『ロシア革命と東方辺境地域—帝国秩序からの解放を求めて—』北大図書刊行会、2002年)

1) Галимьян Таган. Башкиры в Забайкалье. Издание Национальной группы башкир. Гор. Чита, 20 октября 1920г. // Ватандаш. 1997. № 8. С. 113-129; № 9. С. 147-156; № 10. С. 155-168.

2) Юнусова А. Б. В борьбе за белое дело. Три архивных «дела» в жизни Мухамед-Габудулхая Курбангалиева // Археография Южного Урала. Материалы межрегиональной научно-практической конференции. Уфа, 2001. С. 161-191.

この二つの資料を参照しながら、白軍の側でのバシキール人の民族運動とその指導者クルバンガリーの姿を明らかにすることが、本稿の課題である。その際に、1990年代以降のバシキール民族運動の研究の進展³、内戦期における白軍に関する研究の活況⁴という二つの状況とともに、日本におけるシベリア出兵をはじめ東アジアの国際政治の研究成果にも⁵、多くを負っている。

*

*

*

1917年の二月革命によって帝政ロシアは崩壊し、帝国の各地で民族の自立化が進行した。この年の5月初旬にモスクワで開かれた全ロシア・ムスリム大会には、バシキールの代表58人も参加している。大会ではロシアの国制を連邦制とすることが決議され、土地問題の審議に移るが、この問題で、大会が土地の社会化を決議したとき、バシキール代表は退場した⁶。彼らは、今後、タタール人の主導するムスリム運動から独自の運動を展開していくことになる。彼らにとって、タタール人の唱導する民主共和国のもとでの文化的民族自治ではなく、領域自治にもとづく連邦制が、そして反殖民主義のラインでの土地問題の解決が極めて重要な課題であった。7月末には、オレンブルグで第一回大会を、8月末にはウファで第二回大会を開き、バシキールは独自の民族運動を展開しながら、首都での十月武装蜂起とソヴィエト権力の樹立を迎えた。

各地でソヴィエトによる権力奪取が進行するなかで、11月15日に、彼らはロシアに連邦共和国の創生を期待しながら、そこでのバシキール人の領域自治を宣言した。

³ Этнополитическая мозаика Башкортостана. Т. 2. Башкирское национальное движение. М., 1992; Юлдашбаев Б. Х. (гл. ред.) Национально-государственное устройство Башкортостана (1917-1925 гг.). Документы и материалы в 4-х томах. Т. 1. Уфа, 2002; Исаков С. М. Октябрьская революция и борьба мусульманских лидеров за власть в Поволжье и на Урале // Отечественная История. 1999. № 1. С. 55.

⁴ Волков Е. В. Колчаковские офицеры: опыт исторического исследования. Челябинск, 2001; Филимонов Б. Б. Белая армия адмирала Колчака. М., 1999; Колчак и интервенция на Двльном Востоке. Документы и материалы. Владивосток, 1995. なお、『バシコルトスタン民族=国家建設(1917-1925年)』史料集の近刊、第二巻第一部はクルバンガリーに関する極めて重要な情報を集録している。

⁵ 細谷千博『シベリア出兵の史的的研究』有斐閣 1955年; 原暉之『シベリア出兵』筑摩書房 1989年; 笠原・金子訳「セミョーノフ自伝『自分のこと一回想、思索、そして結論』(1)~(10)」宇都宮大学教育学部紀要 第32号~第42号、1982-1992年。

⁶ Таган Г. Башкиры...// Ватандаш. 1997. № 8. С. 115.

I.

その後、バシキール民族運動はウラル地方のソヴィエト権力と対立を深め、18年2月3(17)日にヴァリードフら8人が逮捕された。4月3日から4日の夜にドゥートフ軍のオレンブルグ攻撃に助けられ、彼らは脱獄し、バシキールの民族運動はアラシュ=オルダと協力しながら、反革命側のA. И. ドゥートフ、さらにA. B. コルチャークの側につき自らの民族運動を展開することになった⁷。一方、クルバンガリーはアルガヤシュ・カントンを中心にザウラリエで地方権力の組織化にたずさわり、18年の1月にはモスクワへ向かった。モスクワでは、チェリャビンスク出身でムスリム人民委員部にいた III. マナートフが、彼にスターリンとの会談をもちかけている。クルバンガリーはバシキール人代表とともにスターリンに会見し、8月までモスクワに留まり、その後チェリャビンスクに戻っている⁸。

1918年の9-10月にクルバンガリーはチェリャビンスク郡のバシキール人の五郷で組織された「ムスリムに市民権と自由を普及させる委員会」を「事実上の議長」として指導していた⁹。生まれ故郷のダヴレトバーエヴォ(旧ムハメトクールエヴォ)郷を中心とするこの地方での活動は、彼の資産家としての地位とイスラム名望家としての一族の伝統のうえで精力的になされた。この時期にザウラリエのチェリャビンスク地方では、バシキール人が、クルバンガリーの主導のもとで、バシキール政府のアルガヤシュ・カントンの施政から離脱しシベリア臨時政府に帰属することを次々と決定している。ここでは、ヴァリードフの主導するバシキール政府とその領域自治を批判し、諸民族の協同生活を基礎とした「単一不可分」の祖国、そこでの民族文化的な自治の享受という立場が鮮明となっている。そして、10月末には、彼は、郷里のバシキール代表として、シベリア臨時政府の所在するオムスクへ、その出立許可書を郡コミッサールから得て、向かうのである¹⁰。

18年末から19年初めにかけては、バシキール民族運動にとって分裂と転換の時期でもあった。ヴァリードフはコルチャークから離反し、ソヴィエト政権の側で「自治」の実現に向かう。コルチャークの11月18日のクーデターに対しては、白軍、とくにコムーチュ **Комуч** の国民軍将校の一部で抵抗する動きがあった。ヴァリードフはこれらの将校と連絡をとり、コルチャークを「最高統治者 **Верховный Правитель**」と認めたドゥートフに叛旗を翻そうとした。この12月初めの企ては失敗におわった¹¹。しかし、ヴァリードフはソヴェト側へ移る準備を進め、翌年2月には一斉に赤軍の側に就くことになる。コルチャークによる1918年11月のクーデターと彼の「最高統治者」の表明以降、状況は変わったのである。

⁷ Заки Валиди Тоган. Воспоминания. М., 1977. С. 148-149, 150, 152.

⁸ Юнусова. В борьба за белое дело. № 3. С. 176. マナートフは、ヴァリードフの『回想』では、クルバンガリーの走狗として否定的に描かれている。Тоган. Воспоминания. С. 132.

⁹ Юнусова. В борьба за белое дело. № 4. С. 177.

¹⁰ Там же. № 5. С. 177; Национально-государственное устройство Башкортостана. Т. 2. Ч. 1. С. 355-357, 367-369, 371-372.

¹¹ Волков Е. В. Колчаковские офицеры. Челябинск, 2001. С. 114; Войнов. В. М. Офицерский корпус белых армий на Востоке страны (1918-1920 гг.) // Отечественная история. 1994. № 6. С. 57.

1919年2月15日に、チェリャビンスクに到着したバシキール政府代表は「最高統治者」コルチャークの客車で、バシキール部隊への武器の引渡しと配給を求めたが、これに対し、バシキール政府の解散とそのメンバーを軍事裁判に付すという命令が出されたのである¹²。

他方、コルチャークの側に就いたクルバンガリーはシベリアの反革命陣営のなかで民族運動を続けていく。このクルバンガリー派の目指した運動がどのようなものであったかは、18年末から19年初めの彼の立場をしめした断片的な資料から窺える。

オムスクで、10月31日にクルバンガリーらザウラリエのバシキール人代表はシベリア政府の内相へ宛てた「請願書」を作成している。そこでは、主要な課題の一つとして「独立した宗務庁」の設置を挙げ、その理由として「タタール人のムスリム宗務庁への従属から脱すること」を指摘し、「これは、タタール人によるバシキール人の支配 *засилье* の源の一つであるため」と説明していた。さらに、この請願書では、バシキール人の領域自治ではなく「民族文化・宗教問題でのみ自治 *самоуправление*」を求めるとし、バシキール人の土地返還の要望を含め、この請願書はクルバンガリー派のいわば政治綱領をなしていた¹³。オムスクでの11月18日のクーデターに遭遇して、クルバンガリーはいち早く、その体制への支持を表明している。12月4日にチェリャビンスク郡のバシキールを代表して、クルバンガリーはコルチャークが最高権力を掌握したことへの祝辞を述べた。12月6日付け『シビルスカヤ・レーチ』紙第96号は、そのことを伝え、次のように続けている。「この他に、ムハメド・クルバンガリエフは、バイマク工場に形成されたヴァリードフのバシキール政府の打倒を最高統治者が支援することに、バシキール人は期待していると伝えた。ヴァリードフ自身及びその政府メンバーは、クルバンガリエフによれば、バシキール人全体の考えを表しているのではない¹⁴。」

翌年1月9日には、シベリア政府へ宛て、彼は、ボリシェヴィキの浸透を防ぎバシキール人の土地の社会化を阻止することを訴えるとともに、「タタールの軛」に警戒の念を示していた。また、4月12日付けのA.フォードロフ大佐に宛てた手紙では、彼は、ウファのムスリム宗務庁を「バシキール人をタタール化する主要な根源」とみなし、具体的に、バシキール居住地の中心に位置するウファにおいてムスリム宗務庁を接收し、それをバシキール人の独自の宗務機関へ改組することが必要であると力説するのである¹⁵。

この時期のクルバンガリーには、ヴァリードフの領域自治に対して文化的自治の享有を主張し、タタール人の政治・文化的「ヘゲモニー」からバシキール人の自立をはかり、土地の社会化の名のもとにバシキール人から土地が取り上げられるのを阻止することに力点がおかれている。そして、その旗印はウファにバシキール人のための独自のムスリム宗務

¹² Ватандаш. 1997. № 8. С. 116. 2月18日の朝10時をもって、ヴァリードフの率いるバシキール軍はソヴェト側に移ることになる。Тоған. Воспоминания. С. 194-196.

¹³ Национально-государственное устройство Башкортостана. Т. 2. Ч. 1. С. 372.

¹⁴ Юнусова. В борьбе за белое дело. №. 6. С. 177-178.

¹⁵ Юнусова. Ислам в Башкортостане. Уфа, 1999. С. 111-113; Национально-государственное устройство Башкортостана. Т. 2. Ч. 1. С. 379.

序を立ち上げることであった。

他方で、コルチャークの側からクルバンガリーへの働きかけもなされた。1919年2月16日の8-10時にコルチャークがチェリャビンスクを来訪し、その際、クルバンガリーも「バシキール住民代表」として「最高統治者」との会見に招かれた¹⁶。コルチャークもトロイツクでのコサック大会から戻ると、チェリャビンスクのバシキール代表に、彼らが自らの軍政府を組織するならば、1862年以前のバシキール人の自治の復活もありうると伝えたのである¹⁷。

コルチャークがありうると示唆した「自治 *самоуправление*」とは、バシキール地方に18世紀末に導入されたカントン制のもとでのコサック自治である。18世紀末に、帝国南東の国防備を強化するためカントン制が導入され、バシキールとミシャーリはコサック軍身分に編成された。11のバシキールのカントン、5つのミシャーリの、7つのコサックのカントンが設置され、各カントンはそれに付された数字で特定された。19世紀半ばの農民解放のなかで、バシキールとミシャーリの統治システムとしてのカントン制は廃止され、1863年に彼らは軍籍をはなれ、軍役にかわり貨幣での納税が求められ、民政が施行された。1798-1863年のカントン制の領域区分は、バシキール自治共和国で1919年から1930年まで行政区分として復活し、数字ではなく部族名を冠して用いられた¹⁸。

なおこの時期に、トロイツクでオレンブルグ・コサック大会がひらかれ、コルチャークもこの大会に臨席していた。その彼に面と向かって、バシキール政府を一掃しその軍を解体するとの無意味な命令により前線全体を崩壊させたとの非難が述べられた。コルチャークは、バシキール問題での誤りを認め、事態の修復をはかり、アピールを發した。ヴァリードフは、このことを彼の『回想』のなかで伝え、次のようにクルバンガリーを非難している。「ガブドゥルハイ・クルバンガリエフの類の反動たち以外に、誰もコルチャークの言葉に信を寄せなかった。コルチャークを支持する政府はつくられなかった、コルチャークの支持者が見つからなかったからである¹⁹。」

この間、5月14日付けでクルバンガリーはそれまでの少尉補から尉官に昇任し、コルチャーク軍の第六ウラル軍団へ配属となっている。5月16日には「バシキール全権代表」としてウファからオムスクへの通行が認可されている²⁰。彼は、6月までチェリャビンスク

¹⁶ Юнусова. В борьбе за белое дело. № 7. С. 178.

¹⁷ Ватандаш. 1997. № 8. С. 116.

¹⁸ Башкортостан. Краткая энциклопедия. Уфа, 1996. С. 34.

¹⁹ Тоған. Воспоминания. С. 200. この2月20日のアピールのなかでコルチャークは、「地方的問題での穏健な自治」と「国家制度の庇護のもとでの平和な民族的発展の自由」をバシキール人に保障していた。Национально-государственное устройство Башкортостана. Т. 2. Ч. 1. С. 12.

²⁰ Юнусова. В борьбе за белое дело. №№. 9, 10, 11. С. 179. 第六ウラル軍団は、1918年秋から編成が始まり、19年3月にその編成を終えている。軍団の指揮は、ヴォイツェホフスキー少将がとり、チェリャビンスクで編成された軍団の第11歩兵師団の司令部には第三師団長としてクルグレフスキー少将がいた。Филимонов. Указ. соч. С. 37-38.

に住むが、そのあと、父、二人の兄弟、二人の姉妹、妻と一緒に、アクモリンスクに疎開している²¹。7月25日には、チェリャビンスク市でバシキール人の大会が予定されていたが、その前日の24日にチェリャビンスクは赤軍に占領され²²、この大会を足場にした自治の実現は頓挫した。ウラルの東麓チェリャビンスクでのバシキール人の「自治」の実現は潰えたのである。

II.

1919年の9月には、オムスクに集まったバシキール人活動家により新聞『勇士バシキール』«Казарман-Башкурд»の発刊が決められ、白軍のなかでの運動が緒についている。コルチャーク軍の南方軍司令官Г.А.ベローフと陸相のМ. В. ハンジン将軍の支援もえて、バシキール人にコサック自治を与えるという問題がこの時期に提起された。オムスク政府首班のВ. Н. ペペリャエフもこの考えに傾いた。しかし、オムスクでの混乱のなかで、この問題に決着はつけられなかった²³。

オムスクからザバイカルにかけて、コルチャーク軍のなかでは数千人のバシキール将兵が戦っていた。この東へ後退する白軍のなかで、バシキール兵は無視できない部分をなしていた。クルバンガリーは、バシキール全権代表として、彼らの組織化のために動き、12月にアチンスク市（クラスノヤルスク西方184キロ）でВ. О. カッペリ将軍に、バシキール将兵を一つの師団に編成することを訴えている。タガンの言葉によると「誉れ高いカッペリ将軍は、民主主義の支持者であり、あらゆる反目と抑圧とは無縁であり、このことへの支持を約束した。しかし状況が、彼にこれを許さなかった」。同意し支援を約束したカッペリ将軍も、1920年1月に退却のなかで死亡した。1920年2月12日にバイカル湖東岸のムイソヴォイ駅で、カッペリの後任の東部戦線総司令官С. Н. ヴォイツェホフスキーに報告覚書が渡され、ヴォイツェホフスキーはこの報告覚書を持ってチタのセミョーノフのもとに向かった²⁴。

²¹ Юнусова. В борьбе за белое дело. № 12. С. 180. 9月末にクルバンガリーはアクモリンスクからペトロパヴロフスクに状況を探りに行き、そこで後退する白軍のなかで弟のアルンと会っている。

²² Ватандаш. 1997. № 8. С. 116.

²³ Там же. № 8. С. 117-118. コルチャークは、赤軍の攻撃により自らの「首都」オムスクを11月10日に捨て、オムスク政府はイルクーツクに退却をはじめた。

²⁴ Там же. С. 118. カッペリは、1919年12月からコルチャーク軍の東部戦線を指揮していたが、イルクーツクへの退却の途上で、1920年の1月25日に死去した。イルクーツクにチェコ軍に保衛され後退するコルチャークのしんがり勤め、アメリカの研究者С. F. スミスによれば「帝政ロシアが生み出した将兵の最良のタイプ」とされるが、カン（エニセイ支流）渡河のさい足を凍傷で傷め人糞で運ばれながら、ニジネウヂンスク（イルクーツク北西506 km）で死亡した。彼の後をついだのがヴォイツェホフスキ将軍である。С. F. Smith, "Kappel', Vladimir Oskarovich." The Modern Encyclopedia of Russian and Soviet History. Vol. 15, 1980, pp. 238-239. 1946年5月3日の尋問調査では、クルバンガリーは、カッペリ将軍との合意はアチンスクではなく、クラスノヤルスクとイルクーツクのあいだの「ある集落」でなされ、12月ではなく1月と供述している。そして、この合意は、カッペリ指揮下の2,000弱のバシキ

III.

コルチャーク軍が崩壊していくなかで、バシキール人活動家はセミョーノフ軍に期待を寄せることになる。噂で、セミョーノフ軍が日本軍の支援を受けていることは知られていたし、セミョーノフのもとにムスリム部隊が編成され、アラブの王族の一員も加わっていることが、バシキール兵の士気を高揚もさせていた²⁵。

クルバンガリーが退却するバシキール部隊とともにチタに到着したのは、1920年の3月9日であった。彼がアタマン・セミョーノフに初めて会うのは、3月9日に、このチタにおいてであった。この両者の会見の仲立ちをしたのは、日本軍の使節の大尉 X である。彼は、すでにオムスクでクルバンガリーと知り合っており、セミョーノフとも面識があった²⁶。14日には、クルバンガリーはセミョーノフと実務的な会談を行い、バシキールの民族運動を説明した。セミョーノフの側からは、連邦制のロシアを目指し、中国、日本、モンゴル、ブリヤート、トルコなどアジア諸国との連絡もなされていると伝えられた。そして、セミョーノフは総司令官として、バシキール人の希望に応えると回答したのである。この会談をへて、3月17日付けでクルバンガリーは、セミョーノフに次のように通知している。

「アタマン・セミョーノフ閣下

ボリシェヴィキとの戦いを、ロシア軍のバシキール戦士の士気に応え継続することが望ましいと考え、閣下に、以下のことに関し指令を出すよう所望いたします。

1. ロシア軍と土民師団 *Туземная дивизия* のバシキール狙撃兵から、独立したバシキール騎兵旅団を、閣下の直属下に編成する。
2. 目下のところ、第一バシキール騎兵連隊の編成にとりかかる。
3. この連隊の基本部分をウラルの部隊のバシキール騎兵中隊から編成すること。

バシキール代表 M. Г. クルバンガリエフ チタ市 1920年3月17日²⁷」

クルバンガリーは、セミョーノフのもとでようやくバシキール将兵の個別の軍編成を達成しようとしたのである。しかし、これには白軍の将軍たちからの根強い抵抗にあう。軍参謀部では、カッペリの後を継いだ東部戦線総司令官ヴォイツェホフスキー将軍のもとに全ての師団長が集められ、軍会議が開かれ、バシキール人の要望が審議された。会議は、

ル将兵を一つの民族旅団に編成し、民族としての共同生活とムスリムとしての宗教儀礼の遵守により、バシキール将兵に好ましい条件をつくることを目的としていたと、述べている。

Юнусова. В борьбе за белое дело. №. 15. С. 181.

²⁵ Таган. Башкиры...// Ватандаш. 1997. №. 8. С. 118.

²⁶ Там же. С. 122. タガンのこの資料では、日本の軍人 X となっており、敵方であるソヴィエト権力に人物が特定できないよう伏せてある。この X は、Хираса で、歩兵大尉平佐二郎と推定できる。6月17日のチタのメチェーチ前広場での祝典で、日本国民を代表して X 氏が祝辞を述べている。Ватандаш. 1997. №. 9. С. 149. これも平佐であろう。

²⁷ Ватандаш. 1997. №. 8. С. 122.

この要望を拒否し、軍の民族化を何としても回避すると決定したのである²⁸。

しかし、クルバンガリーはバシキール人部隊の編成に向けて活動をつづけている。4月末には、バシキールの軍人代表団が日本の軍事使節団長と会談し、バシキール部隊の編成について詳しく述べ、日本のシベリア派遣軍の総司令官に伝えるよう求めている²⁹。4月16日には、クルバンガリーは、タガンと一緒にチタからダウーリヤに発っている。ウンゲルン将軍の揮下にあるアジア師団を視察するためである。ダウーリヤに二日間滞在し、第一、第二タタール連隊と、そのバシキール中隊を視察し、軍装、糧食、装備、兵営とメチェーチの清潔さに満足している³⁰。さらにウンゲルンの勧めもあって満州のハルビンに向かい、満州各地でのムスリムによる反ボリシェヴィキ活動を探って、5月3日の朝、チタに戻っている。彼らのダウーリヤ出張、そしてセミョーノフの司令部との接触はカップリ派の司令部のなかに不安を募らせた³¹。クルバンガリーは、5月26日に参謀部長フレシチャチツキーと次長フォードロフから、バシキール軍の独自編成とそれがコサックと同等の自治をえるとの了解を取り付け、6月14日にバシキール軍会議を開催するところまでこぎつける³²。

この軍会議は、チタの行軍アタマンの軍舎で開かれ、バシキールヤ八郡の代表20名を含め、軍の代表27名が参加している。ここでは、バシキール人をコサック身分へ編成する問題がタガン（ロシア名タガーノフ）中尉によって報告され、賛成19、保留3で決議が採択された。

この長い決議文の基調として、バシキール人のロシアへの自発的統合が指摘され、七年戦争とナポレオン戦争でのロシア国家への軍事的貢献が述べられ、ボリシェヴィキによる権力篡奪が厳しく非難されている。そのうえで、この決議は次のように提起している。

「バシキール人民の地理的、民族的、そして歴史的 position に相応した健全で国家的な自治をバシキールヤにおいて実質的に実現する唯一の道は、コサックが自らのものとし、1862年まで実際にバシキールに帰属していた諸権利を彼らに下賜することである。これはバシキールの思慮分別ある人々の不撓の希みであり、最高統治者コルチャーク提督へ裁可を求め提出されたものであった。この故に、この地方の権力の創出が有益であることを確信し、最高司令官アタマン・セミョーノフの公正な見識に信を寄せ、決定する。

1. 全力を持って[東方]辺域の権力を支持し、次のことを求める

a) 極東軍とロシア東方辺域のバシキールがコサックの身分にあり、オレンブルグ・コサック軍に相応する権利と義務をうる

b) 問題の最終的な決定とバシキール・コサック軍規定の作成は、バシクルヂスタンの三分の二が解放された後に召集される全バシキール大会の検討に委ねられる。

²⁸ Там же. С. 122.

²⁹ Там же. С. 123.

³⁰ Там же. С. 123.

³¹ Там же. С. 124.

³² Там же. С. 125-126.

c) ロシア東方辺域のコサック身分にあると表明されたバシキールは、その内治のために、バシキール軍民族局 **Военно-Национальное управление башкир** を創設する。

2. バシキール軍は、コサック身分にあると表明され、アタマン・セミョーノフを自らの行軍アタマンに推挙する権利をうる為、彼がバシキール軍を自らの庇護のもとに置くように、一致した希望を表明する。

3. この決定を、最高司令官アタマン・セミョーノフに決裁を求め、提出する。

4. ロシア東方辺域のバシキール軍民族局議長に、勇猛な帝国日本軍に対し友好的支援への深い感謝と衷心からの共感、さらにロシア、とりわけバシキーリヤにおける法と秩序の再建での輝かしい成果への希望を表明するよう、委任する³³。」

この会議では、セミョーノフを名誉議長にすることが提案され、採択されている。また、コサック軍アタマン・セミョーノフ指揮下の将官をバシキール軍の「名誉長老 **Иль агасы**」に選出し、バシキール軍の「名誉コサック **Иль джигитов**」名鑑に記載することが、クルバンガリーによって提案された。ここで推挙された将官 11 人のうち、8 人は白軍の中将・少将であるが、あとの 3 人は帝国日本軍の少将スズキ、クラサワ、大尉ヒラサである。この提案も、満場一致で採択されている³⁴。

この会議ではタタール民族局 **Национальное управление татар** の議長ニザメツヂーノフの報告もなされている。これは、ロシア内地及びシベリアのムスリムの民族・文化的自治についての報告であるが、セミョーノフ参謀部司令官の **Б. Р. Фрешча** チツキー中将の反対にあい、この件での決議は採択されなかった。彼は、その反対の理由を、これが「純粋に民政に係わるものであり、かつロシア全体に関するものである。全面的な準備を要する」と述べていた³⁵。白軍のなかでのタタール人の民族的・文化的自治の提起を却下したことは、バシキール人にとっても軍隊での民族活動の困難を予測させるものであった。

バシキール人はコルチャーク軍の敗退後、ザバイカル地方にあつて、セミョーノフ軍と日本軍の支援のなかで、バシキール将兵を独自の軍へ編成し、コサックの軍事身分をオレンブルグ・コサックに準じて確保し、故郷の南ウラル＝バシキーリヤの解放とともに、コサック自治を基礎に民族自治をめざそうとしたと言えよう。この会議では、クルバンガリ

³³ Там же. С. 127-128.

³⁴ Там же. С. 128. スズキは、日本軍の第五師団長で中将の鈴木莊六である。『西伯利出兵』中、第四巻、86 頁。クラサワ、ヒラサは歩兵中佐黒沢準、歩兵大尉平佐二郎であろう。黒沢は、1917 年 3 月にハルビンに、平佐は 1918 年 1 月にオムスクに諜報活動のために派遣されている。在ハルビンの黒沢が各地の諜報活動を統一し、やがて「特務機関」の名の下で陸軍諜報機関の活動が展開されていた。原暉之『シベリア出兵』1989 年、176-177 頁。『西伯利出兵』上、第一巻、143 頁。1920 年 3 月に日本軍の配備変更に伴い、特務機関の名称、任務、実行区域が変更となるが、歩兵大佐黒沢は、チタの特務機関の長としてザバイカル地方に展開した第五師団の作戦区域及びこれと連繫した以西シベリア方面を担当していた。同、中、第三巻、1099-1100 頁。

³⁵ Кульшарипов М. М. Указ. соч. С. 332-333; Ватандаш. 1997. № 8. С. 129.

一は、セミョーノフ将軍（ロシア東方辺域軍総司令官）付きの「バシキール代表」として副議長を務めながら、バシキール軍民族局の議長、つまり局長に選出されている³⁶。彼は、セミョーノフ指揮下の白軍で指導的地位を確立したのである。

クルバンガリーは16日の12時に、再びセミョーノフと会談している。6月14日のバシキール軍会議の決定を伝えるためであった。会談では、翌日の17日にムスリムの大祭ウラザ＝バイラムにあわせ、市のメチェーチ前で祈りを捧げ、その後、コサック自治をバシキールへ付与する「証書 грамота」が読み上げられることになった。17日は、朝からチタのメチェーチ前広場には数千のムスリムが多数の婦人を含め集まっていた。バシキール中隊の儀仗兵とチタ守備隊の軍楽隊が整列していた³⁷。

この式典には、日本軍の第五師団長をはじめ将校たちが列席している。午前11時15分にはクラサワ[黒沢]大尉もセミョーノフ中將も着席した。軍楽隊によるマーチが演奏され、セミョーノフは閲兵し、ムスリム代表から歓迎の「パンと塩」を受け取った。彼は、極東軍ムラー長サリムガレーエフの、軍の勝利、さらにバシキール将兵およびセミョーノフ自身への福賀の祈りを挙手の敬礼で聴き応えて、参集したムスリムに向き直った。軍は捧げ銃をとり、参謀部司令官フレシチャチツキー中將が「証書」を読み上げた。

その第一項では、「ロシア東方辺域の領域に展開するバシキールに、オレンブルグ・コサックに適用される権利と義務が取得され、彼らがコサックのために定められた諸原理のもとにおかれる」と表明された。この「証書」は「ロシア東方辺域の全軍の司令官にして全コサック軍の行軍アタマン」たるセミョーノフによって布告され、白軍のバシキール将兵にコサックの自治が認証されたのである³⁸。

この「証書」がクルバンガリーに手渡されると、彼は答礼として、次のように演説した。

「閣下、バシキールを代表して、ご配慮に心より感謝いたします。わが地、バシキールヤから引き裂かれ零落しながら、我々は、昼も夜も東へと移動し、ロシアの最高権力がついに我々の希望を理解され、以前の指導者たちの誤りが、将来、国家秩序の再建が始められる時に、繰り返されることはないであろうと期待しておりました。

異族人に対する閣下の公正な見識を固く信じて、我々は、閣下に導かれるロシアの権力が我がバシキール人に対して明確に自らの立場を示され、そのことによって、同族人が「なぜ退去し、何をもって戻ってきたか」と言うのに対し、我々は自らの正しさを明かすことができると、期待しておりました。

³⁶ Там же. С. 128.クルバンガリーは、すでに5月23日、セミョーノフの指令375号で、セミョーノフ将軍付きの「バシキール代表」と認められている。См. Там же. С. 125.

³⁷ Там же. С. 129. ウラザ＝バイラムは、ラマダンの齋戒が終わったあとの三日間の大祭で、最初の日に肉やミルクの飲食が許され、齋戒期に戒律が守られたことが報告され、メチェーチでは特別な祈りが執り行われる。この祝祭では饗宴と貧者への布施がなされ、祖先の墓参りも行われる。Башкортостан. Краткая энциклопедия. Уфа, 1996. С. 476.

³⁸ Ватандаш. 1997. №. 9. С. 147.

我々は、ここでは、貧しく着るものにも事欠き、馬もありません。しかし、我々がここに来たのは、奢侈を求めてではありません。今このとき、我々の秘めたる夢が叶えられました。バシキーリヤへ向けての我々の前進が、我々にすべてを与えることになるでしょう。

ザバイカル地方における最初の宗教上の祭日が、我々の生活における歴史的な祭日ともなり、偉大なロシアにおける健全な国家機構の設立に向けて、さらに強固な資材を付け加えることにもなりましょう。

ここで、偉大なムスリム家族のイスラムの信仰をもつ他の諸民族のなかにあつて、私が強調しなければならないのは、最高司令官のこの証書が、他のムスリムに対しても国家的原則にたつて彼らの要望を満たすという意味において、確信を強めるものであり、我々の共通の運動へ彼らをさらに強く引き寄せることになろうということです。

もう一度感謝し、最高司令官と彼の領導する軍の健勝を宣明することをお許し願いたい。

ウラー！（参衆全体と軍楽隊によって一致して<ウラー>が轟く）³⁹

このあと、白軍と日本軍の司令官 11 人がバシキール軍の「名誉コサック」に推挙されたと宣言され、再び「ウラー」の歓声で迎えられている。クルバンガリーは、さらに日本軍の参謀長に向けて、次のように演説を続けた。

「閣下、人類を原始の状態に貶め、全世界の秩序を転覆し、文化の殲滅を目指すアカの野蛮な専横から逃れながら、我々の意気は、日本の帝国陸軍が西へ向かっているとの噂を聞き高揚しました。このことは、この地で、様々な種族からなるザバイカル地方で閣下の支援を待ち、国家秩序を作り出そうと志向しているここで、確認されるのであります。

このことを、閣下に近く接壤する地方において、自らの血をもって確固たるものとしつつ、アジア人として、我々は、人類の権利を再興するものとして、勇猛なアジア人とまみえることを期しております。バシキーリヤを含め蹂躪されたロシアを解放するという事業において、誠意ある同盟者としての日本人とであります。

閣下に、ロシア東方辺域バシキール軍会議の、日本の軍と人民への心からの共感に関する、また、第五師団長のスズキ[鈴木]中將をバシキール軍の名誉コサックに推挙したことに関する決定を伝えることを、お許し願いたい⁴⁰。」

これに参謀長は短い答礼で応えている⁴¹。 つづいて、タタール民族局を代表してザキル・

³⁹ Там же. С. 148.

⁴⁰ Там же. С. 148.

⁴¹ Там же. С. 148-9. 答礼は、日本軍がロシア軍全体に対するのと同様に、バシキール兵にも友好的に対応するとし、日本軍将校へ名誉の称号を賜ったことに謝意を述べ、バシキール軍会議のこの決定を日本政府に伝えるという内容であった。

イシュムハメートフは、同じ信仰をもつバシキール人への最高司令官の配慮に感謝し、彼らがコサックの権限を得たことを「武装した自治、つまり、コサックの自治が最も真正たる自治である」と称揚し、彼らがそれを一致団結して堅持することを訴えた⁴²。

このメチェーチ前広場の式典では、儀杖兵が立ち並ぶなか、セミョーノフの許にはムスリム旗、さらにバシキールの民族旗も掲げられていた。この後、チタ守備隊会館に場所を移して開かれた宴会は、セミョーノフによるバシキール人民の繁栄と健康へ向けた「ウラー」の祝杯で始まるが、会場はアジア風に壁に立派なコブラン織が飾られ、アラブの皇族の大佐アスラーノフの挨拶もあり、3時すぎに散会となった。タガンは、彼の『ザバイカル地方のバシキール』で、「ロシアへの諸民族の心からの友誼を覚え、公正な秩序を再建するという共通の活動において成功を期して」散会したと記している⁴³。

この6月17日に宣言され公布された「証書」を実現するために、総司令官セミョーノフは、6月22日付けで指令454号、457号を出し全軍に周知している⁴⁴。6月27日付けで軍民族局長がバシキール軍へ宛てた指令一号では、ロシア東方辺域バシキール軍民族局の活動がチタで開始されたことを伝えている⁴⁵。7月1日付けで、軍民族局長クルバンガリーは、同局の参謀部に宛てた指令第1号で、参謀長として臨時にタガン中尉の任命を伝えている⁴⁶。

タガーノフは、コサック軍として編成されるバシキール軍の参謀長に就いたのである。ここでアタマン・セミョーノフのもとで、白軍のなかに分散配属するバシキール部隊に対するクルバンガリーとタガーノフの指導体制ができあがったといえよう。

⁴² Там же. С. 149.イシュムハメートフは6月14日のバシキール軍代表会議に、最高司令部付き特命官として参加している。 Ватандаш. 1997. №. 8. С. 128.

⁴³ Ватандаш. 1997. №. 9. С. 149. このアスラーノフの演説は、С. 149-150. に紹介されている。クルバンガリーの1946年5月28日付けの尋問調書では、アスラーノフはアラブの皇子 Сауд Аль-Кадыр で、トルコ軍に従軍していたが、ロシア軍の捕虜となった。ニコライ二世への謁見を許され、ニコライは、彼を捕虜から解放し、捕虜アラブ兵を編成し故国へ帰還することを許した。Аль-Кадыр はシベリアで十月革命を迎え、1920年にはセミョーノフの参謀本部付きの中佐であった。6月14日のバシキール軍会議でも、彼は祝辞を述べており(Ватандаш. 1997. №. 8. С. 129)、クルバンガリーとは知己の間柄であった。1920年8月に、彼はシベリアを脱出している。 Юнусова. В борьбе за белое дело. С. 185-186.

⁴⁴ Ватандаш. 1997. №. 9. С. 150-151.

⁴⁵ Там же. С. 152.

⁴⁶ Там же. С. 152-153. タガン(タガーノフ) Г. Г.(1892-1948)は、クルバンガリーと同じくオレンブルグ県チェリャビンスク郡の出身で、メドレセ、ロシア学校、中等学校を修了し教師となる。第一次大戦に将校として従軍し、革命のなかではバシキール中央軍事評議会のメンバーで、チェコ・スロバキア兵とともに反ボリシェヴィキの行動をとる。内戦後、ハンガリーに落ち着き、1930年代初めから1945年までハンガリー国立民族博物館東洋部の長を務めた。1945-48年まで、ドイツのハンブルグ大学のトルコ学の主任であった。 Башкортостан. Краткая энциклопедия. Уфа, 1996. С. 556-557. ヴァリードフの『回想』では、タガンは第三歩兵連隊の指揮官でバシキール軍のソヴィエト側への移行の際、コルチャーク側にとどまった。彼は日本へ脱出し、東京のハンガリー大使館の支援をえて同国へ向い、1924年にヴァリードフと再会している。 Тоган. Воспоминания. С. 193, 196, 210.

この体制のもとで白軍のそれぞれの部隊に所属するバシキール将兵を一つに統合編成する作業がはじまった。ザバイカル地方に展開する白軍に分散するバシキール・タタール兵の登録がおこなわれ、次のような彼らの配置と員数が明らかとなる。

表 白軍におけるバシキール・タタール将兵の概数

	バシキール兵	タタール兵	将校	計	
第一軍団	70	45	2	117	
第二軍団	オムスク師団	60	20	80	
同	イルクーツク師団	65	55	3	123
独立旅団	275	225	2	502	
第三軍団	第一混成師団	147	42	8	197
	ヴォルガ旅団	135	8	2	145
	ウファ師団	800	300	8	1,108
総計	1,552	695	25	2,272	

表からバシキール兵 1,552、タタール兵 695、将校 25、計 2,272 のムスリム将兵が確認できる。(原表ではタタール兵 625 とされているが、計算ミスと考え訂正した) この表以外にウンゲルン男爵の指揮下にあるアジア騎兵師団に二つのタタール連隊があり、そこにはいくつかのバシキール騎兵中隊が含まれていた。このウンゲルン麾下のムスリム将兵 800 を加えて、タガーノフはザバイカル地方に全体としてバシキール将兵はほぼ 1,900、タタール将兵 1,172、全体でムスリム将兵は 3,000 を越えると概算している⁴⁷。1920 年初夏の時点で、セミョーノフ麾下にある軍は大きく見積もって 3 万とされるから⁴⁸、その一割がムスリム兵で、その内三分の二がバシキール将兵であった。

バシキール軍民族局は、「バシキール軍規定」が作成されるまで、コサック軍の編成にならない軍民族局長のクルバンガリーがコサック軍アタマンの権限を、局参謀部長のタガーノフがコサック軍参謀長の任務を果たすことになった⁴⁹。さらに 1920 年 8 月 11 日付けでチタから出されたセミョーノフの指令第 543 号で、新たに編成されるバシキール軍の軍装

⁴⁷ Вагандаш. 1997. №. 10. С. 155.

⁴⁸ ゴルチンスキー『アタマン・セミョーノフ及其の生活と活動』1920 年、31 頁。クリシャリーポフの最新の研究では、セミョーノフの軍はコサック、ブリヤート人を中心とする原住民部隊、カッペリ将軍以来のヴォルガ、ウラル、西シベリアの住民からなり、この時期に 2 万の将兵を擁していたとされる。Кульшарипов М. М. Указ. соч. С. 335. прим. 1. 日本側の概算では、セミョーノフの軍勢は、1920 年 3 月にカッペリ派兵団を隷下におき、戦闘員 3 万に増大し、9 月下旬に 1 万 5 千で「逐次悲境ニ陥ル」、11 月に満州で中国側に武装解除されたのは 1 万 8 千としている。『西伯利出兵史』付表第十八其三。『出兵史』の別の箇所では、セミョーノフ軍の兵力を 1 万 4 ～ 7 千と低く見積もっている。同、第二巻 1126 頁、第三巻 356 頁。ちなみに、この時期にチタを中心にザバイカル地方に展開した日本の第五師団は、戦闘員 8,559 非戦闘員 543 計 9,102 の兵力を擁していた。同、下、付表第一(其三)参照。

⁴⁹ Вагандаш. 1997. №. 9. С. 154.

が規定された。ムスリムの共通の色である緑、1862年までバシキール部隊の軍装に用いられた青を「民族色」としてとり入れ、星と三日月をシンボルとして配したものであった⁵⁰。同日付けの指令第544号では、バシキール軍規定の作成されるまで、バシキール将兵の全てに、配属部隊の如何にかかわらず、健康の回復をまってバシキール軍民族局への登録とバシキール連隊への派遣のため出頭することが命じられた⁵¹。

IV.

こうしてバシキール将兵のコサック軍への編成と、そこでのコサック自治の実現へと進んでいったが、これはカッペリ將軍揮下の白軍司令官らの反感と抵抗にあった。すでにコルチャークのもとでこの反感はあらわれていたが、バシキール将兵の登録と特別部隊への編成が唱えられると、カッペリ派の司令部からのバシキール将兵の民族的志向への危惧とそれへの対抗は日増しに強くなっている。これはザバイカル地方の白軍内部でのカッペリ派とセミョーノフ派の対立という背景もからんでいるが、軍司令部のこの「バシキール嫌い *башикирофобы*」の独自軍編成への危惧には、いくつかの要因が窺える。第一に、軍が全く民族化され、バシキールが自治的な軍単位になることへの危惧である。第二に、ヴァリードフの行動が繰り返され、バシキール軍が赤軍に寝返ることへの危惧である。第三に、バシキール将兵の分離が、残された他のロシア兵の強固とはいえない士気を落とし阻喪させることへの不安である⁵²。

Н. А. ロフヴィツキー少将は、クルバンガリーとのやり取りのなかで、バシキール将兵の分離に心安らかならず、一度ならず、「ケレンスキー体制」の繰り返し、つまり「軍の完全な民族化」をきたすことの恐れを述べていた⁵³。カッペリ派の司令部は、部隊でのバシキール人の民族・宗教的活動を警戒し、いくつかの事件が引き起こされていた。バシキール兵への侮辱や暴行に対し、バシキール人将校から調査と審問を求める声があがった。この訴えに対して、第三軍団では、М. В. スミルノフ少将による調査がおこなわれた。しかし、調査の結果は、訴えられた司令官らには何ら落ち度はなく、逆にクルバンガリーが軍に介入しその権威を失墜させたとして、戦時法に照らし彼を裁くことが求められたのである⁵⁴。

さらに困難な状況が生まれた。この時期に、行軍アタマン・セミョーノフの参謀部次長に И. В. トンキーフ少将が任命されたのである。彼はザバイカル・コサックの出身であるが、コルチャーク時代には、П. А. ベローフ將軍の南方軍参謀長であった。彼は軍の民族編成に反対であったばかりでなく、軍のコサック編成へも軍内部に反目を引き起こすと批判していた。彼は、ベローフ將軍のバシキールへの共感を批判したが、それは、何であれ自由を与えることがロシアの崩壊の根源であると、彼には思えたからである。行軍アタマン（セ

⁵⁰ Там же. С. 155-156.

⁵¹ Там же. С. 156.

⁵² Ватандаш. 1997. №. 10. С. 157.

⁵³ Там же. С. 158.

⁵⁴ Там же. С. 160-161.

ミヨーノフ)の参謀部次長に彼が就いたことは、バシキール人の運動にとって新たな打撃となった。トンキーフは、9月26日付けでチタからバシキール軍民族局に宛て「今後、バシキールの領域に到達するまで、現存の隊列からバシキール将兵を特別の部隊へ分離するあらゆる活動を停止すること」を求めた。これに対し、クルバンガリーは、10月3日付けで行軍アタマン兼総司令官のセミヨーノフへ「報告 *рапорт*」を提出する。そのなかで、先の9月26日付けの指令を添付しつつ、第一師団のバシキール兵の特別中隊への編成が進んでおり、軍団司令部の同意を得て軍団と師団の枠内での編成と説明し、「参謀部次長に伝えられた閣下の命令は、全く特別な部隊を編成し、それを軍団から除外することのみに係わる、と考えます」と彼の解釈を示し、セミヨーノフの判断を仰いだ。セミヨーノフは10月21日付けでクルバンガリーに「全く正しく、貴殿は理解している。私も、第三軍団司令部、貴殿と第一混成師団長の施策を歓迎する」と返答している⁵⁵。

9月26日のトンキーフの指令に対し、クルバンガリーは10月3日付けの「報告」をセミヨーノフに提出し、総司令官セミヨーノフから10月21日付けでバシキール将兵の統合編成を進めることへの認証を得たのである。

しかし、ザバイカル地方の戦況は、1920年の秋には日に日に悪化していた。すでに、8月16日に、バシキール軍民族局は参謀本部の汽車でチタを離れ、ダウーリヤへ後退していたのである。赤軍は10月半ばにチタを包囲し、チタ占領は10月22日に迫っていた。したがって、10月21日付けでセミヨーノフがクルバンガリーへ宛てた回答は、チタ防衛の最後の局面のさなかのことである。セミヨーノフ自身は飛行機でチタを脱出し、汽車で脱出した参謀本部も、すぐに汽車を棄て徒歩で逃れねばならなかった。軍は、アクシャ、ついでボールヂャと厳寒をついての退却であった⁵⁶。ボールヂャからさらに南東の駅ダウーリヤが赤軍によって占領されるのは、その一ヶ月後の11月21日のことである。

V.

8月16日にチタを棄て、さらにダウーリヤを離れ満州に亡命し、活動を停止する11月14日までの3ヶ月が、クルバンガリーのバシキール軍民族局の最後の局面であった。白軍のなかでは、バシキール部隊の統合編成への抵抗が続くなかで、10月5日付けで、チタから

⁵⁵ Там же. С. 161. 第一混成師団長の A.B.クルグレフスキー少将は、バシキール人部隊の編成を妨げていると非難されていたが、9月29日付けで軍民族局長クルバンガリーへ宛て、次のように伝えている。「バシキール兵士の統合を支持する者として、私によってウラル連隊のなかにバシキール騎兵中隊が編成されました。この中隊は現在に至るまで存続し、自らの名称と旗をもっています。獵兵連隊では、ムスリム中隊の編成にむけ準備がおこなわれています。師団の全ての部隊において、バシキールの将兵のために識字学校、および文化＝啓蒙サークルが組織されています、全体として、つねにバシキール将兵の企図に応じ助力しています。」Там же. С.162.第三軍のこの第一混成師団で、バシキール部隊への統合編成をめぐるバシキール兵への侮辱行為がなされていた。См. Там же. С. 160-161.

⁵⁶ Там же. С. 165. アクシャはチタから南に 267 km、オノン川に支流アクシャが合流するところにある。ボールヂャはチタ南方 349 km、ネルチンスク山脈の山裾でボールヂャ川に面している。鉄道の連結駅であり、要衝である。География России. 1998. С. 20, 83.

ダウーリヤへ、トンキーフ少将は軍参謀長の命令として、バシキール軍民族局長のクルバンガリーへ「至急チタへ来ることを請う」と打電した。10月10日、チタで行軍アタマン参謀部長の少将スィロボヤルスキーの官房で、クルバンガリー、トンキーフを交えた会談がおこなわれた。トンキーフはスィロボヤルスキーに Ф.А.プチュコーフ將軍の「通報 отношение」を報告した。そこには、クルバンガリーが直ちに軍の問題への介入をやめること、クルグレフスキー將軍への侮辱で裁判に付すことが求められ、緊急の措置が要請されていた⁵⁷。この「通報」を読み終え、トンキーフはコルチャーク軍のもとでヴァリードフやムルタージンがソヴィエト側へ寝返った「裏切り」を付け加え、「バシキールの自治的な[軍民族]局」の存在が許されていることは驚きであると述べた。彼は、クルバンガリーと軍団司令部との対立が鋭いこと、さらに、ウファ師団、とりわけその第八カマ連隊を挙げ、バシキール兵自身が統合を望んでいないとも指摘した⁵⁸。

スィロボヤルスキーはクルバンガリーに説明を求めた。クルバンガリーは、問題を先鋭化させている原因は、バシキール部隊の裏切りへの危惧ではなく、カッペリ派とセミョーフ派、さらにカッペリ派内部の対立が、バシキール部隊への指揮をめぐる紛糾していることにあると説明した。さらに、ザバイカル地方にはバシキールの土地は一片もなく、軍民族局は行政や経済における施策ではなく、バシキール将兵の民族的要望に応えることを目的としていると釈明した⁵⁹。スィロボヤルスキーは苛立つトンキーフを遮り、クルバンガリーを呼んだのは彼の責任を問うためではないと諭し、司令部との妥協を求めた。クルバンガリーも交渉に入ることを約した。クルバンガリーがチタに到着し会談の行われたこの10日に、プチュコーフ將軍がそこを撤退したことが、この妥協を容易にした。そうでなければ、「ロシア民族主義の首魁」と目されるこの將軍の手先が、彼に危害を加えかねなかったからである⁶⁰。

スィロボヤルスキー將軍の求めに応じクルバンガリーは「報告書」を提出している。この「報告書」はバシキール軍民族局の名で「ロシア東方辺域のコサック全軍行軍アタマン参謀部長」へ、つまりスィロボヤルスキー將軍に宛てたものである。局長クルバンガリーと同局の参謀部長タガンの名が最後に付されている。日付はないが、状況から察して10月10日以降である。この「報告書」は、その第一パラグラフの劈頭で軍民族局の目指すところを、次のように明確に述べている。

「軍民族局の組織は、部隊においてバシキール戦士を民族的に統合し、将来はバシキールの地において、バシキール人民の主権を、国家的原理をふまえ自治を基礎にして確保する

⁵⁷ Там же. С. 162. プチュコーフ將軍については、См. С. 160.

⁵⁸ Там же. С. 162. 第三軍団のウファ師団は、ザバイカル地方に展開する白軍のなかで最大のムスリム兵（バシキール兵 800、タタール兵 300、将校 8、計 1,108 の将兵）を擁していた。カッペリ派とセミョーフ派の対立が鋭くなり、8月には両派の衝突とウファ師団第八カマ連隊への軍事作戦が展開した。См. Там же. С. 160.

⁵⁹ Там же. С. 162.

⁶⁰ Там же. С. 163.

という希望に発しております。ロシア東方辺域における現在の動向にも合致したそのような主権は、コサックの自治として適用できるものと考えられます⁶¹。」

つづく第二パラグラフでは、バシキール軍民族局がロシア東方辺域の国家建設において、コサック軍の軍政府と軍参謀部の権限を持って組織され、そのような国家建設が「統一した国民的で民主的なロシアを諸民族の自治を基礎にして建設できるような国家的基礎」となると表明している⁶²。ここでは「ロシア東方辺域 *Российская Восточная Окраина*」、つまり、セミョーノフが最高統治者コルチャークからその全権を委譲され実効支配しているザバイカル地方での国家建設から、「統一した国民的で民主的なロシア」を諸民族の自治のうえに築くという全国レベルへの構想が示されている。

このために追求される課題が七項目にわたり挙げられている。第一に、バシキール戦士を「極東軍」へ編入し、第二に、軍団司令部との同意のうえで彼らを、軍団と師団において中隊、騎兵中隊、およびより大きな部隊へ統合し、第三に、これらの部隊に、たとえ肩章でも、定められた民族的な軍装が保障され、第四に、バシキール語での小パンフレットと直の通話により情報が伝達されることである。これらの四つの課題は、あくまでも極東軍の軍団・師団の編成内でバシキール部隊の統合を図ろうとするものと言えよう。したがって、第五に、アムール地方のパルチザン部隊に民族を超えて再編成されることには反対する。そして、第六に、バシキール共和国の蜂起した軍との統合にむけ措置をとり、第七に、「他のムスリム、およびアジアの諸民族全般の我々の思潮運動への共感を引き寄せる」ことが挙げられている⁶³。

報告は、この目指す課題に続いて、現在なされていることを具体的に列挙している。第一に、軍団司令部の同意をえて、ヴォルガ旅団ではバシキール騎兵中隊へ、および第一ヴォルガ連隊バシキール中隊へバシキール兵は統合編成されている。第一混成師団では、ウラル連隊バシキール騎兵中隊への編成が行われており、猟兵連隊の中隊へのバシキール兵の統合も予定されている。ウファ師団長と最高司令官の同意を得て、同師団を第二ウファ・ムスリム師団と改称する。その第四連隊と騎兵連隊をバシキール連隊へ、第八カマ連隊をタタール連隊と改称する。第二に、アタマン・セミョーノフ揮下の満州第一混成師団では、師団長の命令に従って、全てのムスリム兵は第二連隊のバシキール・ムスリム中隊へ編入される。第三に、第二軍団では、バシキール兵の統合編成を軍団司令部と交渉している。このように、バシキール兵の編成統合、部隊名の改称の現状を具体的に報告しつつ、これらの措置が早急に実現されることが必要と訴え、「全ての政治活動の成功」はこれに懸かっていると強調している⁶⁴。

そして、「報告書」は、最後に「軍と活動を完全に調整するために」、今後、月に二度ほ

⁶¹ Там же. С. 163.

⁶² Там же. С. 163.

⁶³ Там же. С. 163-164.

⁶⁴ Там же. С. 164.

ど「事態の進展について」閣下に報告し、また、閣下の了承のもとで軍司令部へも月一回の報告を許されたいと結んでいる⁶⁵。

バシキール軍民族局は、アタマン・セミョーノフのもとで「ロシア東方辺域⁶⁶」における国家建設にコサック自治を認められて参加し、このことが、やがて「統一した国民的で民主的なロシア」の基礎となることを期している。そして、ここでは、あくまでも「諸民族の自治」のうえに新しい国家が構想され、そのためにアジア諸民族の共感をえつつ、白軍のなかでバシキール兵の民族的編成とそこでの民族的文化活動が目指されている。

この「報告書」の作成時に、彼らの故郷であるウラルではバシキール人の反乱にとらえられていた。ステルリタマークでの六月事件に端を発したバシキール人の内乱、それとの連携も、ここでは考慮されている。これは、「報告書」で提示された第六項と関連している。この第六項では、バシキール共和国の反乱者との合流が掲げられ、そのために「創生されるロシアにおいて、最高権力が宣言的なアピールと原則的指令において、明瞭かつ判然とバシキール人民の諸権利を指示すること」および、「我々の領袖の民主的な方針」を伝える人物をバシキール地方に派遣することが提案されている⁶⁷。

しかし、南ウラルのバシキール本土での反乱に呼応して有効な措置を、遠く離れたザバイカルからとる術もなかった。白軍、とりわけその司令部には、民族部隊編成への根深い不信と危惧が存在し、また帝国において民族的な「自治」を承認することへの躊躇があり、これらは、バシキール将兵の統合や文化活動を妨げるものであった。さらに、セミョーノフ軍自体が深まる敗勢のなかでチタからの撤退を強いられる状況にあった。

このような困難と軍事的危機のなかで、軍民族局長クルバンガリーは軍司令部に向けて悲痛な「アピール」を出す。全文、紹介しよう。

「軍司令部へのアピール

ロシア東方辺域バシキール軍民族局議長より

バシキール人民は、革命を心から歓迎し合流したが、十月の政変以降それに失望して、民族的諸権利の強化に向けて、また、ポリシェヴィキのインターナショナルな進攻からバシキールを守らるために一連の断固たる措置をとった。バシキール共和国において、

⁶⁵ Там же. С. 164.

⁶⁶ セミョーノフは、1920年1月4日にコルチャーク提督から「ロシア東方辺域」の全権を継承していた。А. Б. Юсупова. В борьбе за белое дело. С. 161. прим. 4. 1919年11月14日にオムスクが赤軍の手に落ち、コルチャークは退却するなかで、12月23日付けでセミョーノフに第240、第241号と二つの命令を出している。第240号の命令でセミョーノフをザバイカル、プリアムール、イルクーツクの軍管区総司令官に任命するとし、第241号ではセミョーノフを少将から陸軍中將へ昇任させていた。そして、1920年1月4日の「訓令」でコルチャーク提督はこの「ロシア東方辺域」の政治・軍事の全権をセミョーノフに託していた。これは、最高執政官コルチャークと首相ペペリャエフの連名でニジネウゼンスクから出されていた。セミョーノフは1月20日に「ロシア東方辺域」での全権の継承を確認した。ゴルチンスキー、前掲書、19-22頁。

⁶⁷ Ватандаш. 1997. №. 10. С. 164.

魂の内に秘めた民族の精神は、自由を目指す闘士の血と骨をもって強固となっている。なぜ、かくも飢えと寒さのなかを五千ヴェルスターも彼方のここまでやって来たのか、と問われると、ポリシェヴィキの力づくの権力を打倒し再建されうるブルジョワ＝資本主義体制のもとで、国家的原則にたつてバシキール人民の領域的な諸権利を確保するためと、我々は答えてきた。我々の理念を今に至るまで、我々は信奉してきた。

最高司令官の証書と我々の自治に関する指令に心動かされ、その実現を、つまり、部隊においてそれが実施されることを、我々は待ち望んできた。我々の期待は果たされることなく、我々、バシキール将兵が、貴官らの約束の虚偽を確信するときは近い。

私のもとに届く情報から、貴官らに次の質問を投げかけざるをえない。

1) 貴官らは、民族的統合に反対せずバシキール戦士に信を寄せると確言しながら、軍団と師団のなかでバシキール将兵を統合編成するつもりはあるのか。

2) もしそうであるなら、バシキール共和国の占領を待たずに、貴官らはそれを行うつもりはあるのか。

3) 司令部が、裁判も審理もなしに、バシキール兵に銃殺にも及ぶ侮辱を為していることを、貴官らは知っているのか。そして、これに対し、どのような措置が貴官らによって講じられているのか。

このことに、私は、ロシア東方辺域バシキール軍民族局の存続をかけている。貴官らが旧来の見解と対応を継続するならば、猶予することなく、貴官らとのあらゆる関係を断ち、我々の立場の変更がきたす重大な結果について、バシキール将兵に表明することになる。

局議長 M.Г.クルバンガリエフ⁶⁸」

ここには、白軍の司令部に対する強い不信が三つの質問を迫るなかで表明され、その回答如何では軍当局との絶交、バシキール部隊の立場の転換、つまり、白軍からの離反さえありうると、軍民族局の存続をかけて訴えているのである。しかし、軍司令部には、この「アピール」に応答する余裕はもうなかった。1920年11月7日にバシキール軍民族局は、中国との国境の街マンチュジュリア[満州里]に到着した。そして、その三日後の10日に指令第28号でもって、クルバンガリーは軍民族局の活動を「今後の事態が明瞭になるまで一時停止」と伝えた⁶⁹。

11月14日に、クルバンガリーは、この満州里で、バシキール部隊に向け最後の「指令」を発した。その一つでは、軍民族局の参謀部にあて「私が緊急の案件で日本へ出発するのを前にして」、彼が不在の際の代理執行体制をタガン中尉以下の人物に委ねている⁷⁰。もう一つの「指令」は、バシキール軍に宛てたものである。全文を紹介しよう。

⁶⁸ Там же. С. 165-166.

⁶⁹ Там же. С. 166.

⁷⁰ Там же. С. 166.

「生まれた状況の故に、私が 1920 年 11 月 10 日付けで[軍民族]局参謀部へ宛てた指令第 28 号によって、私に委任された同局の活動は停止された。これに関連し、以下のことを表明するのが、私の義務と考える。

1) バシキール人がコサック身分にあると表明され、その軍[民族]局が組織されたのは、彼らにロシアのブルジョワ＝民主体制のもとで自立した自治 **автономное самоуправление** を保障し、戦士を部隊において民族的に統合するという希望に発していた。彼ら戦士は、一つにまとまり、健全な民族精神を保持し健全な民族部隊の要となることができ、「何故、去り、何をもって戻ってきたのか」との同族人の問いにも堂々と答えることができよう。

2) 最高司令官の指令第 457 号にもかかわらず、部隊においてバシキール兵を統合編成するという試みは、何ら結果をもたらさなかった。部隊の司令官らのこの件に関する命令は、明らかに、彼らの了承のもとで執行されなかったのである。

3) 現有する情報によると、司令部のあるものは、バシキール将兵自身が統合をあたかも望んでないと表明することも憚らなかった。

4) バシキールの運動に共鳴する将校たちを、あたかも煽動したとして逮捕し時には侮辱した。バシキールの側から責任者を糾し、かかる行為の原因を究明することが求められたが、叶えられなかった。そのため、国際情勢に主要な関心を払いつつ、時機を待つことが目的にかなっていると考える。バシキール戦士の満州里駅から東への移送に関しては、軍が事実上崩壊したため、自由な市民としての各人の私的な行為とみなす。

局議長 M. Г. Кurlбангариев
参謀部長 タガーノフ⁷¹

この「指令」で、最高司令官セミョーノフの 6 月 22 日付けの指令第 457 号が実現されなかったことをクルバンガリーは確認しつつ、満州里からバシキール部隊が東に転送され沿海・アムール州で転戦することを拒否し、将兵を「自由な市民としての各人の私的な行為」に委ねることで、白軍のなかでのバシキール部隊の解体を表明したのである。ここで「市民」と訳したロシア語の «гражданин» は、本来は非軍事的な平民をさす言葉であるから、文字通りコサックの軍事的自治の解体を意味したといえる。

1920 年 11 月 14 日に、白軍のもとのクルバンガリーを指導者とするバシキールの民族運動は終止符をうった。あとは、国際情勢をにらんで「待機」すること、とりあえず「緊急の案件」で日本に赴くことであった。

結局、赤軍は、白軍を迂回してマツィエフスカヤ駅からダウーリヤを包囲した。白軍は全てを放棄して満州里に到着し、ここで中国と日本側に武器を引き渡した。中国の警備隊

⁷¹ Там же. С. 166-167.

は白軍部隊をどこにも出さずに、暖房列車に乗せ沿海州へ移送した。⁷² その後、極東の沿海州とアムール地方では、1922年10月25日に赤軍がヴラジオストークに入るまで、内戦は続くが、バシキール将兵の白軍のなかでの民族運動は、この1920年11月14日をもって終了した。クルバンガリーは満州里で、バシキール将兵のその後の行動を「自由な市民」の「私的な行為」とし、バシキール軍の武装解除に応じたのである。

クルバンガリーは、チタ在留時に、ザバイカル州の庁舎で出国パスポートを取得している。当時、日本軍の陸軍大尉平佐と会っているが、平佐は、クルバンガリーの弟アルンが戦死し埋葬される際に参列し、敬意を表し知遇となっていた⁷³。チタの日本軍特務機関はクルバンガリーに関心を示し、彼との接触を維持しながら日本の外交＝大陸政策におけるイスラム・ファクターとして利用することを考えた。クルバンガリーを懐柔し、日本の大陸政策のイスラム・カードとしようとの動きは、1920年2月にヴォイツェホフスキー将軍が彼の参謀部にクルバンガリーを招いたときにすでに窺われた。将軍は参謀部の日本軍将校とクルバンガリーを接触させようとした。「東洋人」としての彼と日本軍の接触により、将軍麾下のムスリム兵の掌握と日本軍の支援をヴォイツェホフスキーは期待したのかもしれない⁷⁴。

クルバンガリーは、11月にハルビンの日本領事の推薦状を携えて、ビクメーエフ大佐と一緒に東京に向かった。東京では、帝政ロシアの最後の大使クルペンスキーを訪れ、彼の口添えで、日露協会の後藤新平に、さらに後藤を介して元老の大隈重信に紹介された。後藤、大隈といった日本の大陸政策に大きく関与した二人との会合で、二度目の来日が取り決められた。二度目の来日は翌21年2月のことである⁷⁵。これ以降は、クルバンガリーは満州、そして、やがて日本本土でも「国際情勢に主要な関心をはらいつつ、時機をまちつつ」活動を展開していくことになる。

⁷² Там же. С. 168. すでに10月22日にチタは赤軍によって占領されていたが、11月19日にマツィエフスカヤ駅でセミョーフ軍は壊滅的な打撃をうけセミョーフ軍とカッペリ派の軍は満州里とモンゴル方面へ潰走していた。

⁷³ Юнусова. В борьбе за белое дело. С. 169-170. クルバンガリーはこの内戦で多くの肉親をうしなっている。父のガビドゥラと一番年下の弟ガブドゥル・アヴァリは1919年9月に赤軍の第5軍に捕えられ、判決により12月7日にステルリタマーク監獄で銃殺されている。もう一人の弟アルンはカッペリ軍でバシキール中隊の指揮を執り、その後ヴォイツェホフスキーの揮下に配属された。1920年4月8日、ヴェルフネウヂンスク近郊の戦闘で重傷を負い、死亡した。Там же. С. 164-165, 169; Ватандаш. 1997. № 8. С. 123.

⁷⁴ Юнусова. В борьбе за белое дело. № 15. С. 182.

⁷⁵ Там же. С. 170-171.